

アラソン

ノルマン  
デー人のプロ  
ポIV

翻訳：高村昌憲

- 三十一 (ストライキ権)
- 三十二 ドレフュス派は語る (LE DREYFUSARD PARLE)
- 三十三 ソルボンヌ大学は身を守る (LA SORBONNE SE DÉFEND)
- 三十四 山岳鉄道 (CHEMINS DE FER DE MONTAGNE)
- 三十五 月数で数えよう (OMPTONS PAR LENES)
- 三十六 産業は贅沢のことか (INDUSTRIE, LUXE?)
- 三十七 利己主義 (L'ÉGOÏSME)
- 三十八 読書を学ぶこと (APPRENDRE À LIRE)
- 三十九 山岳驢馬 (MULETS DE MONTAGNE)
- 四十 情熱の薬 (REMÈDE AUX PASSIONS)
- 四十一 秋 (AUTOHNE)
- 四十二 トルコ人の野蛮性 (BARBARIE TURQUE)
- 四十三 シヨン運動家 (SILLONISTE)
- 四十四 慣習と幻想 (POUTINE ET FANTAISE)
- 四十五 軍人の情熱 (PASSIONS MILITAIRES)
- 四十六 フロベール (FLAUBERT)
- 四十七 囚人の違法行為 (DÉLIT DE DÉTENU)
- 四十八 平和主義 (PACIFISME)
- 四十九 比例代表制についての要約 (RÉSUMÉ SUR LA R.P.)
- 五十 (理工科大学生)
- 五十一 (悪口を忘れること)
- 五十二 (若者でいること)
- 五十三 (急進主義)
- 五十四 (健康な精神)
- 五十五 (速度)
- 五十六 (事実と想像力)
- 五十七 (鉄道事故)
- 五十八 正義は勝つ (LA JUSTICE VAINCRA)
- 五十九 (共和制の棘)
- 六十 学課 (LEÇONS)

### 三十一 (ストライキ権)

ストライキ権を否定することは、少し性急すぎます。市民である仲裁人たちは明確な概念を手に入れたいと良く思っています。そして、家では誰かの権利を認めないことがあり得ますが、労働力に基づく一人の人間の権利はそうではないというこの相違と共に、市民の家のように一人ひとりが労働力の主人であるのは明白であるように見えます。更にもその上、人間は自分の家を譲渡することが出来ませんが、労働力は譲渡出来ません。自分自身を売る権利はありません。この売却は無効です。そのことは働かないという権利が、使用者とか給料に対して、あるいは余りに辛い仕事に対して、最も明白な権利の一つであることを理解させています。奴隷は廃止されていますし、そのことは皆に同意されていることです。もしも使用者に甚大な力があり、従業員が余りに弱かったなら、現実として何時も奴隷になるしかありません。仲裁人たちはこの依存関係を、決して権利の制度としては見ないでしょう。労働契約というものは当事者の一方の破棄によって解消されます。この原則は通常の場合でしたら十分です。しかし、国家はそれ以上を要求します。一市民が公共事業に協力することを強制出来るように国家は望みます。それ故に、国家は権利を軽視するのでしょうか。

際限もなく権利を主張するのは困難なことですし、これらの偶像が何故生まれるのか、私には分かりません。限度のない権利は考えることさえ出来ません。権利とは同意があることです。権利は契約を前提としますし、この契約は各人が与えると同時に、受け取ることを意味します。権利というものは協力を前提とします。協力というものを拒否することは、義務というものと同時に何らかの権利も放棄し拒否することなのです。それ故に、ストライキ権を行使したいと望む者は、幾つもの義務も受け入れることは避けられません。

限度のない権利の実例は決してありません。私には通行する権利があります。しかし、もしも通りが命令で封鎖されたなら、私の権利は制限されます。私は自動車で走っています。警官は何台もの自動車に警棒を上げます。検問もします。もっと分かり易く言います。火事になれば私は水バケツを持って行くことを要求されます。それは強制された労働です。そのために権利は保留されると人は言うのでしょうか。いいえ、違います。その証明というのは、もしも私がバケツを運ばされ、そして私と同じ位に力が強い隣人が同じ義務を果たさなかったなら、それは公平でないと私は言えます。要するに権利を獲得することは、限度のないような権利ではないのです。というのも、そんな権利は不可解な抽象でもあるからです。権利を獲得することがあっても、それは如何なるものであっても平等の権利です。それ故にストライキ権は、条件もなく限度もなく絶対であると私は理解しませんし、その時の権利は回り回って循環し所有しているものであり、生活するための権利であっても条件付きで限度があります。要するに公共の脅威においては国家によって行使することが出来る徴用の権利があります。一人ひとりはその時、自分の道具と能力

を与えなければなりません。あるいはその時とは、戦争の時でもあります。しかし、同じ人間が私たちと一緒に社会を作ること拒む時でさえも、彼らの権利で私たちを悩ませないようにするために、前もってこれらのことは熟考していなければなりません。

(一九一一年八月三十一日)

### 三十二 ドレフュス派は語る (LE DREYFUSARD PARLE)

ドレフュス派の人が口調を高めて、素晴らしい情熱に目覚めることは、今でも大変良く起きています。私がいたサークルでも、彼らの一人が立ち上がりましたが、何に関してか私は最早覚えておりません。私は彼の話に何か我慢していました、何故ならそれは異常な世論の動きを少しは良く説明するのに役立つことが出来るのですが、反動勢力を敗走させて既に勝ち誇ったようにしているからです。

彼は言います、「権利のために、そうです、権利のためなのです。しかし、良く理解しなければなりません。私はドレフュスのためには愛を持っていなかった。私は彼と共に耐えませんでした。私が国外追放も監獄も恐れなかったのは、私のためでも他人のためでもない。その事件には問題があるから私は興味を持ったのだ。私は弁護士だ。弁護士として話すのだ。私は論拠と確率を公平に試しているのであって、そこに個人的感情を入れることはない。そして、私が受け入れた世論には妨げられたが、決して論拠があった訳ではなく、強制されて或る時は耳を塞がれ、又或る時は表明されたが、私が自由に語るのを禁じたがったのは明白だった。それはサークルの中に協調を生んだが、進んで耳を塞いでもいた。時には禁止されて、ヴェールを被った脅しや忠告が最も頻繁にあり、ブラックリストに載せられ、孤立していた。最初は私を愚か者と見た言葉の暴力があり、噂が流され、狂信的行為であると言われた。信仰があり、正統派であり、迫害でもあった。私は穏やかである。私は慎重である。私は忍耐強い。私は秩序を愛しているし法には従う。しかし、思考する自由を愛している。更に、私は後に引かない。世論という最も小さな暴君が私の痛い処をつく。何故でしょうか。私は最良のことを考える。私は敵の言うことを聞く準備が出来ている。あらゆる方法で明らかにする準備である。率直に言って、私は個人の権利と国家の権利の重さを量りたいのだ。私は予め少しも言わないように専念する。主張も仮説も全て私は認める。私は、敵が有害で偽善で愚かであるとは仮定しない。私に言うあらゆる人間が私の判事である。私は、如何なる批判者でも私の論拠に悪感情を抱いていても構わないから、十分に議論したいのだ。しかし、私の声はついに掻き消されて終わりにしたいのだ。私が自由な人間として話し思考することを妨げようと意図しているのを、人は認めている。そのことを私は今でも激しい怒りに震えている。私が臆病で慎重で怖くなって彼らの信条を受け入れ彼らのお説教に従っ

て言うことを、彼らは敢えて期待し信じたのだ。私はそのことが良く分かった時、私は殺されるか勝つかであるのを理解した。私は、自由な人間の武器に身を投じた。そうなのだ、アナキストであっても構わない。何故なら、何よりも先ず迫害者たちを潰さなければならないし、検討する精神を解放して自由にしなければならない。それ程ドレフュスの権利のためというのではなく、思考して語る権利のためである」。これらの話は活火山の噴煙のようです。死火山になると信じるのは間違えることになるでしょう。

(一九一一年九月五日)

### 三十三 ソルボンヌ大学は身を守る (LA SORBONNE SE DÉFEND)

ソルボンヌ大学は身を守っています。そして、その論争を読むのは大変に面白いです。それというのもフランス文化同盟は至る所でラテン語の使用を望んでいますが、ソルボンヌ大学はこの同盟の名前が良くなく、ラテン語文化同盟であると嘲笑しているからです。それは全てがおかしいだけです。何故なら、精神を育てるためにフランス語よりもラテン語の方が良いかどうかを知ることは問題ではないからです。重要なことはフランス語とかラテン語とか何でも構いませんが、文化というものに反対して教育する方法を批判することです。

ラテン語で良かったのは何でしょうか。作家たちが説明していたことですが、フランス語への翻訳は、作家が説いた思想まで遡るのを生徒に強いる考察の勉強が行われることを誰でも理解しますし、翻訳して読むのをその様に教えていました。フランス語だけでもこの勉強は行うことが出来ますが、より難しくなるのは明白です。何故でしょうか。私たちは自分なりの方法で考えを説明すべきではないからです。作家は私たちが行うことが出来なかったことを、もっと上手に行ったのです、そして作家によって私たちはその儘身に付けているのです。それ故にフランス語の作品が難解なら、理解するのが大変に困難です。そしてフランス語の解釈は、生徒にも先生にも非常に困難な訓練なのです。そして先生は事態を切り抜けますが、如何にしてやるのかあなたにご存知ですか。歴史的な解釈でその時代の事件に暗示されたもの、似たものや影響されたものを探しながら、一行のテキストのための注釈に、容易に一頁を割いています。今から百年間の〈藤製ボディー〉のマネキンに飾られる歴史をこの方法で説明されるのを想像して下さい。現代の私たちの時代、論争、無駄話の全てを蘇らせねばなりませんし、ヨーロッパ中の新聞を引用しなければなりません。

私が高度な人物の話聞いたのは昔のことではなく、それは大臣の話でしたが、平凡な観念で昔からの流儀での説明を嘲笑して、歴史的方法なら称賛していると私は良く思います。そのことは道理があるように見えます。しかし、そこに二つの間違いがあるのが私には分かります。一つ

目は、学生たちには毎年新入生がいて、毎年全員が学習を繰り返していることを忘れてのことです。その次に忘れたりやり直すことを教員が覚えなくて、基礎的なことを軽蔑し、飽きて、図書館で多くを勉強して、非常にお粗末な教育をするに至り、自分の小さな世界にうんざりするようになります。上手に教育するには純真で新鮮でなければならず、殆ど「狼と子羊」の寓話を聞く子供でなければなりません。

二つ目の間違いは、この寓話の説明は容易であると信じていることです、私は文法も歴史もないと言っているのであり、一般的概念で言っているのです。人は余りに早く権利や権力を大目に見ますし、嘘を言う狼の話の大目を見て、それが正しいことを望みます。ソルボンヌ大学は公会議になると口ごもりながら言う、と私はその様に認識しています。それはソルボンヌ大学が自ら認めています、何故ならこれらの権利や権力という一般的概念には一人ひとり非常に心を動かされても、それに慣れて、解明するのは恐ろしく困難であるからです。少なくとも人はそこに自ら身を置くべきであり、ラ・フォンテーヌ(1)の本の一覧を探す機会を与える代わりに、明日の先生方にはそこに身を置かせるべきです。遊ぶのは大変に容易ですが、くたくたに疲れた精神には野原に身を置くのが良いのです。

(一九一一年九月十日)

(1) ジャン・ド・ラ・フォンテーヌ(一六二一～九五)は、詩人でありモラリストである。

### 三十四 山岳鉄道 (CHEMINS DE FER DE MONTAGNE)

私たちが山岳鉄道を使って観光客向けホテルに泊まること、つまり娯楽のためだけを考えると、恐ろしくて尻込みさせられます。毎日、人々や荷物という並外れた重さのものが上がったたり下がったりしますが、それは大きな価値を生むためです。彼らがそのために支払う金額を私は計算しません。というのも一人の人がお金を支払えば、他の人はそれを受け取るからで、これらの贅沢な支出というものは、全体の収支計算に利益を与えていると信じられているからです。私は失った力を計算します。恐らく唯一の本当の豊かさと、人間の失った力を私は言っているのです。

その勢いがニス塗りの美しい木製の列車を引き上げて行くために必要な労働力というものを計算してみてください。その勢いを高い所では遮断しなければなりません。築かれた大きな水槽の中で、出来る限りそれを濾過して澄ませなければなりません。そして次にタービンでこの水の流れを導いて、極めて長い部屋の管で放出しなければなりません。水門や弁で調整されたそれら

のタービンは発電機を動かします。タービンは、斜めになった羽根で支えた働きで早く擦り切れます。その水が引っ張って行く小さな砂利は金属板に穴を開け、直ぐに篩のようになると私は言われました。しかし、発電機は何をしようとするのでしょうか。それらは山地の住民には最高の物であり、多くの労働の日々を仕舞い込んでやってくれますが、大変に強い圧力や限りない排出量で突然に屑鉄になって仕舞います。その後、支柱から支柱へ銅線が縦の木々の間や岩や谷底に張り巡らされます。鉄道は山を貫き、岩壁に張り付き、目も眩む橋を通ります。旅行者はそれらの巨大な労働に驚嘆します。旧道のじぐざぐの道や、あらゆる小さな村や、ヒースの生い茂った荒野の小径には見向きもしません。それらは玩具です。

時々、人影が塔によじ登ってから降りる時、小道がぐるっと回っているのが見え、その近くには小さな畑があり、ジャガイモとか秣を背負った人が見えます。それらの地方では収穫物を人間の背中で運ばなくてはなりません。季節が変わる度に、籠は大地の物で活気づきます。有益な労働と無益な労働との対照は顕著になっており、愚か者たちに笑われます。「今世紀に、未だ牛の飼料を背負って一時間も運んで降りて行かなければならないのは何故でしょうか」。事實は、彼らには男も女もなく、ホテル業者でも男も女もなく、王室の財物などを管理した人たちとか、旅行用の大型トランクの赤帽たちであったり、整備員とか、絵葉書の売手になってパンやチーズや肉を生産しないで、全ての人々が観光客を引っ張ってもお金持ちにならないのは不思議です。しかし、良く考えて見ましょう。観光客たちが私たちにお金を齎しても、私たちが彼らに本当の豊かさを何も齎していないのは明白で、もっと正確に言うなら、私たちは豊かさを深淵に捨てているのです。これらの恐ろしい報告は既に事実になっています。そして、ドン・ファンよ、注意なさい。日曜日さんはもう笑ってくれません。

(一九一一年九月十七日)

### 三十五 月数で数えよう (OMPTONS PAR LENES)

今は秋の上弦の月です。昨日は細い三日月が雲に隠れていました。月は東の空から出てきて大きくなっていき、夏のすっきりとした影ではなくなって、四方に広がる光を放っています。私は、月に従って天候を見るのを余り本当のように思っていないませんが、人々はそれを信じていたと理解しています。というのも月は雲の厚さを見せてくれるからで、目に見えない水蒸気まで見せてくれますし、その姿は明るい空とか雲とか、あるいは風を考えずに太陰月を考えることが出来ません。人は月を数えて予想し、思い出していましたし、そこから強い関係が生まれて宗教となり、恐らく最も古いものの全てがあり、言葉がそれらの痕跡を守っていたのです。本物の月に比べてカレンダーの月とは何でしょうか。

私はカレンダーを軽視しませんし、一般の年も軽視しません。それらを生んだのは人間であり、要塞や法律や市場や監獄、ついには町を造ったように生んだのです。人間は恐怖をなくすために、他のものも自ら生み出しました。ふしだらな夜遊びや夢想や月への祈りや野蛮なことの全てです。そして、それらの町の歴史には世紀や情熱や友情や拷問が混じり合っています。自然からの不幸が遠のいて行くにつれて、次第に人間による不幸が大きくなって行きました。安全と一緒に不公平が生まれました。というのも監視人は至る所で暴君になったからです。人間の法律は、他にも色々な季節や飢饉や災難を生み出しました。多くの犠牲的精神や愛情もありました。嵐に対しては恐らく屋根がありました、屋根があれば嵐もあつたのです。新しい不幸には新しい薬がありました。苦い薬です。奴隷の後はサラリーマンです。復讐の後には苦しみです。大都市は、小さな町の後です。鍛冶屋の後には工場であり、静電球であり、夜間労働です。銀行があり、証券があり、暴君が隠れています。全ては人間の生産したものです。季節の代わりに手形の期日があり、手形割引人が神々です。優しい月はすっかり忘れられて仕舞いました。

それは全てが必要だったのですが、多分ルソーは少し恩知らずでした。小舟の中で眠ると、自然の本当の息子としてあらゆる事物を崇めながら、悪徳も激昂も都会人の愚かさも軽蔑していました。それというのも、住むことが出来る自然を作ったのは人間の産業であるからです。耕して、鎌で刈って、枝を刈り込むのが出来るのは鍛冶屋職人がいるからです。ルソーは或る日、荘厳な峡谷の端に建てられた工場を見るのに襲われました。この工場がなければ私たちの善きジャン＝ジャック・ルソーとしては、あなたを散歩させることが出来ません。精々誰かと一緒に狩をして、空腹になり、恐怖を抱くだけです。そしてあなたは、裏門や城の跳ね橋や矛のついた槍を、日が沈む頃には愛するようになります。というのも判事、金の計量係、巡査、文法家、喜劇俳優、そして時代の長い冬を過ごす者なら何にでもならなければならないからです。しかし、私たちの本当の祖国や母を崇めて、名を挙げるための声でなければならなかったことも本当です。それは共和歴の月数で数える新しい時代になります。

(一九一一年九月二八日)

### 三十六 産業は贅沢のことか (INDUSTRIE, LUXE?)

産業は、それ自体が目的ではありません。それは方法であり、防衛でしかなく、自然に反対し、人間の強盗行為に反対するものです。ところが私は、産業が目的として捉えられていると理解していますし、お金持ちがけちになるのを目的として捉えるのと同じ方法です。けちは不幸のように見えますが、けち自身は自分なりに幸せであるのを私は良く知っています。けちは若者には暴君になります。周りの者を皆老けさせます。彼が死ねば、その外の者を解放して自由にします

。文明社会は、恐らくこれと同じ狂気に向かっています。しかし社会は決して死にませんから、ついには全世界を大変に圧迫するでしょう。そして発明したり建築したりすることに夢中になって、私たちは或る種の哀れなお金持ちになります。全ての人が働きますが、貧しくなります。従って守る事です。私たちは全く恐るべきもので、新たな危険に悩み、私たちが持っている大砲で脅されます。或る辺鄙な村で休息するや否や、これらの未来の真実がもっと生き生きと感じられますが、そこは鉄道では決して行けない所です。今は労働と収穫物に均衡があります。大地はきれいにされていて健康的で肥沃で人を歓待し、そして美しくもあります。大きな事故や小さな事故を新聞で読んだ時、事件後の或る日に一段と、大地に素晴らしい安全を感受しますし、詩人のように言います、「彼らは幸せな農夫である、もし幸福を知っていたとするなら、本当に幸せな農夫たちだ」。

時折、憲兵も人は見ます。又は医者が出す音も人は聞きます。あるいは雨になりそうな風が吹く時、小さな鉄道の汽笛が谷底全体に聞こえます。昨日は畑の真ん中で、蒸気の脱穀機の音がこの平和な田舎に鳴っていました。それらは町の物であり、町の騒音です。それは田舎での労働、どっしりとした大地の高原、庭のように耕作された谷、山の中腹にある森、そして泉の高さに上手く詰め込んだように建てられた家々の調和を乱していると人は言いたいのです。しかし、それは半分しか当たっていません。憲兵がいなければ、熱狂も犯罪も行われることになります。というのも嫌悪、中傷、悪口を言うお喋り女、そして娘を待ち伏せる男たちがおります。医者がいなければ、汚物や恐ろしい病気の山となります。交易や輸送、町から来る機械がなければ、この楽しい谷も痩せた畑と抜け出せない藪になって仕舞います。高原は狼のいる森林になって仕舞います。飢饉になり、呪術師が出てパニックになり、村々に争いが起きます。恐怖の夜になり、至る所に強盗が出て、最も大胆な人間が男爵や伯爵や王様になります。その外の人間は貧困になり、不公平な目に遭います。田舎を浄化するのは町です。恐らく、それは工場や装甲されたものでなければならぬし、農民が門を造りたくなるのはつまらない新聞や町の腐敗のお陰です。多分、幸福であるには、穏やかな心と一杯の美味しいスープがあれば十分です。しかし恐らく、大変に単純なこれらの幸福を手に入れることは、思ったよりも難しいのです。

(一九一一年十月六日)

### 三十七 利己主義 (L'ÉGOÏSME)

誰もが自分のことしか考えないし、自分のためにしか生きないし、自分しか愛さないと本に書いているのを良く読みます。しかしながら、必要である限り人の命を助ける救命者もいれば軍人

もおります。そのことは、世界中の利己主義について大変良く知られているこの敷衍した考えも、実際は現実のことから遙かに乖離していることを暗に仄めかしています。少なくとも自己愛というこの思想は、多くの注目すべき魅力を当然のこととして許していますが、人が遭遇する以上に不明瞭なものの一つであると言えます。

それ故に、誰が自分に満足するのでしょうか。実際に自分自身を愛するのは誰でしょうか。大抵の人が隣人の真似をするのは、単に習慣ばかりでなく、世論や道徳や悪癖のためでもあります。そして多くの人々は、滑稽で笑われないうちに死の危険にも身を晒しましたが、それは他人の非難が矢のように私たちに刺さるのを分からせてくれています。そして何よりも尊敬される言葉がない者は、直ぐに叩かれて皮を剥がされるが故に、それは慎重さからであるのが容易に説明されます。しかし、この説明は恐らく表面だけのことでもあります。他人の意見は少しおかしいもので、明らかに好かれることもなく嘲笑が問題になると直ぐに私たちは傷付きます。それは私たちが驚いて飛び上がる最初の動きになります。反対に少し考えれば、私たちは穏やかな儘です。それ故に私たちがそんな風になるのは、他人の感情で感じているからであり、私たちの自我はそれ自身だけでは決して十分でなく、自我自身では決して成り立っていないように私には見えます。

他人に雷同する人間には容易で幸福な何かも一緒にある、とも考えなければなりません。何かの熱狂で彼は集団行動に参加します。一人の新兵が兵役に就くや否や、直ぐに多くのことを考えます。数え切れない程の多くの社会があります。家族もおります。恋人もおります。そして、大なり小なりの社会に参加する一人ひとりが、個人そのものと同様に社会そのものに屢々執着します。彼らの情熱は殆どが、社会との関係が強いことに執着します。けちは自分の愛に限度を設けているとしか私は理解しませんし、更にけちんぼは或る意味で自分の財宝を守るために自分を犠牲にしていると言わねばなりません。反論を私は十分望みます。しかし、直感的な行動であっても、その人間の基本となる機能や働きはどんな風にでも保持されるものではない、と理解させてくれます。人は自分が望んでもいない別の生き方をするとするよりも寧ろ、大変上手に死にます。そのことは多分、金儲け主義の人生が利益から別れて、利益と反対のこともする利己主義者に戻るということです。しかし、その人間的になった人物には何と云っても愛情があり、そして次に勇気もあります。彼を慎重な人間に戻すのは平和であり利益でしかありませんが、その時は既に十分に歳を取っている時でもあります。

(一九一一年十月十一日)

本を読んだり読み直したりするにも、人の力がいます。或る時はそれらの観念をまるで輝かせたり和らげたり若返らせたりするように作用しますし、或る時は防備服の上からでも更に打ち、そして本気でそれらの観念を体験します。春のような明るい感動があり、高等な懐疑があり、秋に抱く懐疑はあらゆる事物に霧が生まれ、熟考と厳しさと乾きと抽象という冬ごもりがあります。そのような人の力にはプラトン、スピノザ、ルソー、バルザック、ユゴー、スタンダール、トルストイのものがああります。幸いなことに人々には有益です。何故なら或る種の解決を精神に与える可能性があるからです。というのも思想が鳥籠の中に閉じ込められると、大変に具合が悪いからです。私はそれが小さな集団の中で動いているかどうか、同じ形式の中で停止し息を詰まらせているかどうか、そして欲望や野心や失望を生き生きとした光で照らしているかどうかを理解します。その時、それは狂信であり情熱でしかなく、際限のない悪の源泉です。

ところで、もしも会話が上品で美しかったなら、精神も十分に解放されて自由になりますし、申し分なく人間に係わる全てのことが見える天国のような処へ導いてくれます。しかし、生きたプラトンには毎日出会えませんが、プラトンと一緒に人と人間的に話すことが出来ます。もしも彼に出会ったなら、交換する財産は沢山あるでしょうか。同様に会話は、人間的なものよりも動物的なものであり、女性を気持ち良くさせて男性の実力を満足させることであり、本人がいなければ悪口を言われるようになるのが分かります。赤貧とか無知とか臆病から感情的になり、嘘をつくようになります。書物は最良の仲間です。それは要求することもなく与えます。一人ひとりが出来ることから始めます。そしてプラトンの本が出版され、出来る限り忍耐して読みます。耳の聞こえない者たちにも繰り返し読まれます。以上は、読書から為になることが決してなかったなら、その最良の仲間は枝葉末節のものとなって、多くの非難を浴びることになる理由となります。小学校で人は何を学ぶのでしょうか。読書を学びます。ソルボンヌの文学部で人は何を学ぶのでしょうか。読書を学びます。そこには文学的教義の本質があります。

それで何をすべきなのでしょう。先生方は何時も若々しく、純真で率直であって欲しいと思います。ところが古臭かったり、気難しかったり、リユーマチに罹っていたり、大声で喋る人々もおります。或る人々は読書が出来ますし、頑張って、方針を決めて、考えを明確にして少しも変えません。何かの政治的情熱にも、思った以上に良く貢献しますし、出版する本も同様です。というのも、彼らはあなたを支配しているからです。そして、そうでない人々は図書館司書たちで、彼らは本を読みすぎていて、全て読んでいましたが、間違っって読んでいました。読むために読んでいたのです。そしてこれらの術学者たちは、良き読書家を馬鹿にして、術学者扱います。若者たちは直ぐに彼らと同じ様に冷めていて、関心がなくなり、退屈して、歳を取りたいと望みます。以上は、現在ではソルボンヌ症状という病気になっています。

(一九一一年十月十四日)

恐らくあなたは時々、美しい山岳驢馬に感嘆していました。それらは山岳に適した動物で、筋肉にも恵まれています。外観上は全く眠っているように見えても、慎重で躊躇した歩き振りであり、険しい道や不規則な道端の小石を見詰めたり嗅いだりもします。しかし、突然に鉄製の杖のように鋭敏で尖った脚になって、荷物と一緒に鳥のように起き上がり、既に耳は立っています。その間に、あなたはその驢馬の後をついて行ったり、追い越そうと考えます。最高の機械がその儘生まれたようで、草や葉を食べて養分にして、そしてあなたに還元するのです。いやそれ以上の多くのものをあなたに還元します。耕作、取り入れ、馬小屋や馬具を付ける仕事をやって、還元してくれます。でも何故でしょうか。何故なら植物の養分は、蓄積された何らかの太陽のエネルギーであるからです。太陽は、大気中の炭素を動き回らないガスの姿で葉や草に固定化させました。炭素は燃えます。そこに生まれるのがエネルギーです。その残滓は最初、僅かな大地の灰になりますが、基本的にはガス性の何らかの灰であり、炭酸ガスになって最早燃えなくなるとエネルギーを供給することが出来なくなります。しかし、太陽光線の作用で小さな緑色の物体の性質になり、この炭酸ガスが再び燃焼性の炭素の状態になることが起こります。それは樹木の葉や茎や幹になります。樹木の幹は燃えてあなたを暖めますし、機械のボイラーを暖めます。しかし、驢馬は新しいものを捉えて作り出します。何か全く新しいものであり、砂糖とか、この種の豊かな生産物でエキス形をしています。そして、それはあなたによって機械による仕事で形を変えます。驢馬は道をよじ登りますが、それは太陽が働いているのです。

技術者は言いました、「その通りです。しかし、電車もよじ登りますが、それも太陽が働いているのです。というのもここでのエネルギーは急流から齎されます。急流は雨や雪が齎します。雨や雪は雲が齎します。そして、雲を集めて移動させるのは太陽です」。この関連は、私たちが発見した新しい関係によって満足させられています。しかし、違う点を見るのも大変に重要であると私は思います。急流は驢馬のように立ち上がったたり運んだりしません。何時も落下するために戦いますし、最後まで落下します。それは固められたダムや、回転する障害物に対して押しつけ、あなたのために作用しますが、それらはタービンの羽根になります。それらの障害物は作動しなければなりません。硬い小石も障害物を削ります。それらの小石は大量に運ばれて行きます。セメントになり、粉末にして焼かれます。鉄も大地から取り出されて運送され、焼かれて鉄鎚で打たれます。板になり、組み立てられて加工されます。軸になったり、磨かれたり、調整されます。これらの作業は全てがハンマーで打たれた結果であり、超人的な肩で打つことが分かりますが、歯板で歯車が痛むと一枚の羽根が百人もの旅行者を持ち上げる巨大な驢馬であることが分かるというものです。そして、それは無駄であるかもしれませんが、現代における物事も良く説明しており為になると思います。驢馬を気の毒に思うことがあっても、散歩をする人を驢馬に代わって自分の肩で運ぶ人々の群を見ることは決してないということです。

(一九一一年十月二十日)

#### 四十 情熱の薬 (REMÈDE AUX PASSIONS)

狂人や反狂人やノイローゼ患者たちが病人であるのは私も認めます。それが分かるのは、彼らの病気を和らげる臭化物やシャワーの匂いからであり、理屈からではありません。そして結局のところ私が言いたいことは、人が慰められるから正しい理屈の力を感じるのでは決してなく、正しい理屈の力を感じるから慰められるのであり、全く逆なのです。そこにあるのは賢者の考え方でしょうか。情熱についての真実なのでしょうか。それは賢者ではなくて、善悪の評価で慰めたい人は間違った賢者であり効かない薬なのでしょうか。よろしい、本物の賢者は他者に代わろうとします。慰めというものが有益であるというのと同じ考えが、或る種の慰めにならないのかどうかを理解しましょう。

或る男が病気で熱が出ている時は、狂ったような行動や言葉で、看護する人に見て貰います。一度治って仕舞うと、全て忘れて仕舞いました。そして彼に何か言っても、良くあることのように彼は決して困ったりしません。只、次のように言うだけです、「私は病気だったのだ。熱があったのだ」。この様にして彼は非常識を全て容易に、最もらしい原因に帰しますが、それらは細菌であったり、除去が悪かったり、器官に垢がつくことであったりします。

悪い夢は短い妄想と同じもので、何かの思い出を守っているのです。とろろで、それは良く起こるのでしょうか。私たちは夢を真に受けたいということです。そこに意味とか予感を探します。それが行っていることは、そのことを連続して考えながら、私たちは恐らくそれにはなかった正確さを与えているということです。従って、私たちはそこに悲しむべき教えに支配されていて、屢々恐怖となり、そこから同種類の別の考えも取り出して、全く不明瞭で悪い夢想で、恐らく夢とは別物で、従ってラシーヌの『アタリー』に至るような激しい怒りになり情熱になります。最も悲しい迷信や狂信的行為の大部分の結果は、本当のように見做して完全なものにされ、話された夢が齎して、夢とは別のものを生んでいるのだと私は考えます。今ではそれは分かっていることです。笑って済ませたいのです。もし何時も笑って済ませなかったなら、その中で物質的メカニズムや機会を呼び起こす感動になる十分に正確な観念はないということです。そのことがなければ、如何なる夢でも構わないということです。「その夢は何も表していないし、何も具体的に示していない」。絶対に独り言を言っているようなもので、「狼の足音」を聞いたと思ってその原因を探したなら、「それは風の音でしかない」のです。要するに、夢とは雲の形のように奇妙な光景になるのです。

ところでこれらの考察は、不安定な精神にとっては良いものであり、夢そのものを大変に悪く考え始める時であると私は思います。というのも十分に自分を観察して、精神に生じたものを全

て利用するようになるからで、全てを理解したいと思うのですが、本質的には決してそこまで達しません。恰も、人間は偶然に言葉を投げつけて言ったかのようで、私たちの思考は決して意味が分からなくて苛々しているかのようでした。人と共通した意味で思考しなければなりません。そして齒の痛みやリューマチを我慢するように、情熱の感情にも我慢しなければなりません。

(一九一一年十月二三日)

(次章へ続く)

### 四十一 秋 (AUTOHNE)

秋には色彩と音楽があります。あらゆる色調があります。野は若返りました。大地は裸になり、新鮮な感動を与え、すっかり湿っぽく、色々な褐色を全て見せています。そしてキヅタの濃い緑色から白樺の明るい黄色、柏の金色、ブナの赤色まで、葉にはあらゆる色調があります。花の最後にも豊かな色があり、大変に淡彩を施されたもの、大変に明るいもの、至る所に漂っている白い光が辺り一面を全て少しずつ明るくしています。人々は太陽を忘れます。明るくしているのは葉であり花々です。

夜が来る時、それらの色彩が消える時、風が音楽を生みます。ぱちぱちと燃える火、大変に乾いた古いドアの音、響く家、それらがコンサートを催します。そして嵐が始まる時はもっと良いものになります。そこに人々の音を聞きます。うめき声、怒りの声、悲しみが無い訳ではないのですが逆に喜びもない訳ではない声を、暖炉の隅にいる時に聞きます。しかし、もしも事物の最も奥深い詩を把握したかったなら、これらの社会の感覚や文学を殺さなければなりません。その風が遠くから来るのは本当です。単に今出た音ばかりでなく、運ばれて来る遠くから来た音の人々は聞きます。谷も木々も揺さぶりました。そこで生じた音が私の処に来ます。森林の全ての音が私の窓辺までやって来ます。そこにあるものを良く判別したなら、そのイメージは事物と同じになります。

しかし、それは既に多くの注釈がなされ、恐らく多くの想像力を生んでいます。もしもこれらの音をもっと正確に知覚するように専念すれば、そこには音や和音や本当のオーケストラが聴けます。しかし、それは奇跡ではありません。というのも昔は空気に小さな波を生むからです。そして、これらの波は作られます。一方の波はお互いに妨げ合い、水の上を交差する二つの航跡を見ると理解出来ます。その結果、二つの波が一瞬停滞し、たまり水になります。他方の波は増加して、更に勢いが強まります。そして、もしもあなたが少しその先を更に良く考えたなら、最も勢いが強くなった波とか最も弱くなった波は、まさに言葉という正確な意味を持った音楽であるのをあなたは理解します。従って、最も混乱した音は音楽を生みます。そして、私たちが夢を見て信じ、最も良いものを知覚して生み出す時は良くあることです。最高の画家は、あるが儘に色彩を見た人であり、偏見から見ていないのは明白です。そして音楽家にとっても、やはりそれは本当です。音楽家は恐らく、聴き方を知っている人間であり、音の中に自分自身は何もなく、あるいは殆ど何もありません。反対に、芸術家は自分の感情を全てのものに混ぜるのであって、齎されるものではないということです。というのもあなたはその時、何故豎琴と一緒にダビデはイスラエルの初代の王サウルを宥めるのか、何故芸術は情熱を清めてきれいにするのか、を言う術を最早知らないからです。自分自身による芸術は、情熱の感情を清めてきれいにすると思っています。それは自然でさえあります。それだけのことですが、それで十分です。それは全て

にとって代わるものです。

(一九一一年十一月七日)

#### 四十二 トルコ人の野蛮性 (BARBARIE TURQUE)

トルコ人たちは負傷者たちの息の根を止めてから戦場衛生班へ引っ張って行くと今でも言われています。イタリア人たちの話ですが、そのことの真意を知るのは諦めましょう。戦争のこの風習は大変に奇妙です。北米のヒューロン族の男は、そのことを何も理解しません。彼は言います、「何故あなたは躊躇しないで、頑強で健康な男たちを不具にしたり、手足を切ったり、虐殺するのはですか。あなたは犠牲者の人数を高慢に数えます。死体があればある程、あなたは満足します。しかし、もしもあなたの砲弾が怪我人や熱病患者や瀕死の人々に命中して全員を殺したなら、それはあなたにとって犯罪になりませんか。何故か。何故ならこの暴力行為は必要ではない、とあなたも言うからです。何故なら怪我人や熱病患者たちは決して攻撃しませんし、脅威にならないからです。戦争の目的は平和になることであり、明らかに勝利した人々を激しく追いかける理由はないからです。でもそれらの理屈には何の価値もありません。先ず第一に、怪我人や病人が最早怖くないということは明白ではありません。治って再び武器を取る連中がいることを見逃しています。しかし、厳密に考えるのは止めましょう。あなたは何を望むのでしょうか。あなたは怖がらせたいのです。あなたは、殺すために殺すことは決してないのは承知しています。一方を殺すのは、他方の人々に勇気を出して貰うためであり、国民全体に勇気を出して貰うためであり、老人や女性や医者たちにも勇気を出して貰うためです。従って、あなたは人を容赦しなくなって、怪我人や手当をする人々にも容赦しません。というのも、足を無くした怪我人や最早戦えない人しか、頑固に抵抗する人々について行かないことを確信できるものは私には何もないからです。そして私は、勇気を出して怪我人の手当をするこれらの女性たちというものは、倒すのが重要である敵国の精神力の相当な部分に匹敵することも考えられます。それ故に敵たちを恐れさせて壊滅させることも、もしも本気で参戦するなら正しいことです。自分の意志で志願して参戦する人々は、改良された武器と文明化された力を当てにして、本来の力を調整して限度を持って行動することである、とあなたは何度も答えています。しかしあなたは、攻撃して既に支配し人数や科学や産業で圧倒している人々に、如何にしてこれらの法則を受け入れさせるのでしょうか。この国民がじたばたして勝者の法則では死にかけていても、この国民は最後の痙攣で何処へ爪を向けるのかを見詰めなければならないのでしょうか」。

(一九一一年十一月十二日)

#### 四十三 シヨン運動家 (SILLONISTE)

私が祈りから聞こえたものを或るシヨン運動家(1)に尋ねた時、彼は答えました、「本質的にそれは公平な瞑想です、もしもあなた自身で真摯な活動を望んだとすればですが。それは通りの騒音に反しての内省です」。大変に意外なこの答えは、私たちにとってはお互いに大変貴重で、それは或る種の本能による反聖職者主義のものでありますが、満足して尊敬すらしている宗教と、うんざりさせられる迷信とを識別したくなるものです。というのも結局のところ、宗教的なもの全てをもって、何が何でも矛盾して考えたいと思ったなら、なんという無駄なことでしょう。

ヴォルテールという人は、宗教と聖職者至上主義を理性的に識別していました。常にそこに戻らなければなりません。しかし、ヴォルテールの宗教が少なくとも寺院も司教もなく崇められ、彼の言う宇宙の創造主が現代の自由な思索家に相応しいかどうかは私には分かりません。心に感じれば感じる程、私は或る種の抒情的な思いでルソーの宗教を多く語って来ましたが、証明するのは非常に難しいものでもありました。というのも、正義は他人の人生において報われなければならないとルソーは断言しているからで、ルソーはそのことを疑っていません。この世で悪人が勝てば、ルソーには思い上がりの証拠になると思われました。ところでその証拠が、心の底から自分に尋ねる自由人であるのを満たすのか、私には疑問です。ルソーが自分に感じるのは寧ろ、今から早速、不正や偽善や悪人の勝利に反対するようになることです。そして、威圧的なこの義務感はその証拠を打破します。というのも、事物が自ら調整して別の部分を補うことを、一瞬だけでも信じる権利は無いからで、それでは余りに都合が良すぎます。反対に、正義が一方では悪意から、他方では無関心からこの世を去る瞬間を認めた時、私たちには沢山の責任があるとすっかり感じることを断固として望みますが、薬はありません。私たちは精神秩序の重荷だけを感じます、重荷だけです、責任だけです。そしてその時、優れた女性が「男性たちが認める正義しかないとしても、この世には全てに正義は決してありません」と言いました。神を当てにしてはいけません。そこには現代の一般的な宗教の奥義があります。

しかし、それでも私は一般的宗教のことを言います、何故なら人間の最も崇高な義務について断固たるこの考えは、それ自身で或る種の信仰であり、人間の宗教であり、人間の本質における信仰であるからです。動物の本質に反対して人間の本質を祈ることです。不正を憎む活動もこれと同じで、私たちは勝利することが出来ます。それ自身を信じなければなりません。不公平で高慢で野心的な動物それ自身でなく、聡明で何かと批判したが、熟考して、工夫する動物それ自身でなければなりません。そこにあるのは宗教的反発力です。私はシヨン運動家と共に意見の一致を見ました。それでは誰に反対してでしょうか。まさしくイエズス会に反対するのは、イエズス会は神学と儀式の全てと一緒に無信仰なのです。何故なら無信仰の彼らは、情熱の感情や

権力、あるいはそう言った方がよければその種の徹底的な悪意が勝つと信じているからです。そして、それによって心からロザリオの祈りを唱える善き女性と、徹底した無神論者は、彼らが信じられない位にお互いに大変に近い仲間であり得るのです。

(一九一一年十一月十六日)

(1) シヨン運動家は、二〇世紀初頭のカトリック民主主義の運動家で、ジャーナリストで政治家のマルク・サンニエ(一八七三～一九五〇)が創始し指導した。

#### 四十四 慣習と幻想 (POUTINE ET FANTAISE)

観察することが可能であった最も原始的な人々には、共通の特色があります。彼らは一つの出来事が他の出来事にぶつかるのですが、それには媒介を求めることはなく、それらにぶつかる出来事に結びつけるのを望んでいるのです。例えば一人の外国人が彼らの家に辿り着き、何日か後に巨大な亀を砂の上で捕まえます。直ぐに、これらの出来事の一つは他の原因になっていると言うことで意見が一致します。ヒューロン族の国の旅行者が或る夜、小屋の壁に兎の影を両手で映して遊んだ話を人々は読みます。翌日には偶然に魚が大量に捕れました。人々は直ぐに、その原因は兎の影であったと結論を下しました。そして、旅行者に影をもう一度兎の影を映すように勧めましたが、彼は決してやろうとしませんでした。何故なら彼は信心深い人間でしたが理性もあったからです。決して魔法使いの役割は演じたくなかったのです。

この種の話は沢山あり、それらの関係は北アメリカとかブラジルとかオーストラリアの原始人たちによって生まれているのが分かりますので、本来は人間の本能であると考えて、恐らく私たちが思想と呼んでいるものと同じ様な内容であると考えようになりました。他の動物も迷信から全く安全な場所にいるのではありません。私はサーカスでアザラシが鼻の上でボールを踊らせているのを見ました。アザラシの思考が明らかになれば、それは魚を捕る方法も明らかになるのです。しかし、どのようにして調教師がアザラシにこの考えを持たせたのか大変良く分かります。一つのルールを生んだのは、行動に合わせて繰り返し経験させたのです。アザラシが鼻の上でボールを上手に踊らせる度に、魚が与えられました。調教というものは同じやり方で行われますし、執拗さが無い訳ではありません。動物たちは覚えた芸から容易に投げ出しません。大変に確実である証拠が示されなければなりません。私が挙げた例や文明人が行ったことを他に観察すれば、反対に人間は容易に考えを変えますし、進んで新しい迷信を生み出し、まるで全ての事物が全ての事物次第であって、証拠能力が乏しいものであっても、更にそのことは心の底から本

当であると考えて喜んでいるかのようにも思えます。そして、証拠が示される前に、それらの関係を仮定するこの状態は、人も知るように多くの間違いを生み出しましたが、全てがでっち上げであり空論でした。というのも幾つかの関係を排除して他との関係を考慮に入れるために、少しは一貫した実験的な確認しか必要ではありません。そして更に今日では、正しい精神は、例えば私たちの惑星上には磁気の変化と太陽の黒点との関係が推測されています。そんな風に一つの考えに至ります。沢山の考えが起こりますが、その大部分は最初の考察や最初の調査で消えて無くなります。吟味されるのは少しであり、人間の力が増加します。自分を騙すには二つの方法があります。一つは慣れによって動物になることであり、もう一つは独創性によって人間になることです。

(一九一一年十一月十七日)

#### 四十五 軍人の情熱 (PASSIONS MILITAIRES)

彼らは皇帝の墓へ行きます。モーリス・バレスが言ったように「栄光の一杯」をそこで飲みます。ところが強くなりたいたいというこの精神的教えは、まさに余計なものです。人間というものは栄光を愛します。もっと正確に言うなら、人間というものは世間の中で、そして自分の心の中で勇気を愛します。自然に従って進んで繰り返すように、人間は一人一人がばらばらではないのです。茂みの中や藪の中にいるのです。全く一人では上手く生きられませんし、全くの一人ではないのです。本当のことを言えば、孤独は虚構でしかありません。自分の人生を全くの一人であると感じるや否や、狂ったような激しい悲しみを感ずし、被害妄想とかそれに似た様な多くの気で病む病気になるかもしれません。反対に、思考し、行動し、多くの人々と一緒にいるとを感じるや否や、入浴しているように満喫した生活になります。肺には空気が必要のように、人の心には愛が必要です。流布する人生訓はサロンで生まれますが、そこには必然的に偽善も用心深さも支配しています。その結果、十分に抑制された概念が取り出され、それによって人間は自分自身しか愛さないことになり、果実が実った木のようにそれに似たものを大切にします。自分自身の愛というものは無意味です。愛というものは、私たちが私たち自身の外へ持って行くことであり、そして私たち自身を自由にします。

激しい怒りが胸の中のみ閉じ込められると、病気になります。しかし、英知も十分にあります。その英知を巡り、そして感じて生活しなければなりません。もしもあなたが人間の本当の薬を飲みたいと思うなら、好きな本のうち一冊を読みなさい。直ぐにあなたの感情と考えはあなたから逃れて、あなたはそこで満足します。もしもあなたが人間たちを愛していたなら、虚構の代わりに何があるのでしょうか。

そこで私は軍人たちの情熱のことを言います。それは表面的には激しい怒りですが、内心は愛です。寧ろ、激しい怒りは愛によって救われます。というのも、もしも人間はいらいらしたり人を殺すのが喜びであると信じられているなら、非常に間違っ理解していることになるからです。戦争における喜びとは、人と共通した観念、人と共通した行動、集団の熱狂によって、人間の本質というものが動物的な部分まで正しさを証明し、葛藤も後悔も恥辱も無く、完全な調和の中で職務を見出すことにあります。嫌悪は悲しいです。嫌悪は病気です。だがその上更に、決して嫌悪で参戦するのではありません。戦争を準備するのが嫌悪であると精々言えるだけであり、参戦するのは愛です。敵は遠くにいます。殆ど見えません。〈異邦人〉です。〈きっかけ〉です。そのことを良く理解させてくれるのは、騎士道的な感覚であり、それは自分自身で感じた勇気について敵に感謝されるような結果になることです。以上が、古い軍人は屢々平和を最も高い徳として示している理由であり、恰も戦争の嵐が彼の洞窟の全てを浄化したが如くです。軍人の情熱は理解しなければなりませんし、それを明らかにして実際の姿をその人自身に示して、もっと美しく正しい戦闘や征服を示さなければなりません。何故ならそれは仮面を被った〈同胞愛〉でしかないからです。

(一九一一年十一月三十日)

#### 四十六 フロベール (FLAUBERT)

フロベールの『ブーヴァールとペキュシュ』は残酷で厳しい本です。私は二十歳の時に読みましたが、いわば聖書のようなものでした。未だ風が刺すような春でした。氷が張る寒さでしたが、当時喜びを齎す心の中の全ての花々は決して枯れませんでしたが。しかし、或る人々はそこに止まって、今でも何故果実を与えているのか、私には理解出来ないことです。学校の腰掛から抜け出て、思考することも慎重さも無く、記憶を一杯にして、そして貧しくもあつた少年は、完全に滑稽です。少年の最初の意見は、最初に着たシャツ同様に、ぴったりと上手く着ます。良く言われているように、全てが平凡で、丈夫な借りものであり、習慣で錆びています。鷹のスペイン産のマラガ酒や廃墟の歴史が読まれる時に、何故その滑稽さが分からないのでしょうか。大変に知的で良く行動するこの友人は、私と一緒にフロベールを読んでいたことを私は再び思い出しています。彼は珍しいもの、洗練されたもの、尊大なものを探していましたが、全てを軽蔑していました。その上、私よりも臆病な彼は滑稽を恐れて常軌を逸していました。彼は今、思いやりが無く退屈しているのだと私は推測しています。決してペダンチックにならないのを望むことは、殆ど不可能なことで一つの欠点になりますし。十回のうち九回は彼という人間を殺すことになります。

私は、フロベールを全て読んでいて何でも知っている男と知り合いになりました。殆どのものを読んでいて、彼が知っているのももっともだと私はその人を理解しています。ついには何か大変に単純な関係を私に説明してくれるようになり、私は把握したものを大変自慢していました。彼は私に何時も言いました、「それはあなたが発見することです」。そして実際に、それが何年も前に発見されていたことを私は知りました。彼は何度も良く読んでいたのです。そして私自身もそれを読みました。しかし、結局のところ他人が既に発見したものでも何故工夫しないのでしょうか。私は或る日、二足す二は実際に四になること、あるいはもっと正確に言うには、二足す二は三足す一と同じ数になることを発見しました。私はそれを自慢していました。そして、権利とか権力とか〈共和国〉のことを思い切って如何に書けば良いのでしょうか。その時の私は、土地に肥料を施すとか、果実のなる樹木を栽培したがったり、その道の専門家でもないのに缶詰を用意したいと思っていた善良な二人の男のようでもないのでしょうか。彼らがスピノザを勉強している概論書を読んで下さい。それは正確であっても愚かです。彼らは十年間黙考しないで判断します。けれども始めるためには十分に新鮮でなければなりませんし、始めるためには愚かでなければなりません。今あるような何らかの主題について、私たちの最初の考察は限りなく愚かです。それを恥じて赤面する人はもう自分のやり方で先へ行きません。彼は本を読んで真似をします。その繰り返しです。言葉は大胆ですが、思考は臆病です。感情的にはブーヴァールではないのですが、批判的にはペキュシュで、高級な洋服を着ています。本当に、私は二人の善き男たちがこの上なく好きです。

私が殆ど見逃さないものに滑稽さがあります。それは滑稽さを畏敬することです。それはフロベールの中では至る所にあります。それに気付くと、巨大に見えました。『サランボー』では全篇中にあります。全く愚かにも海は青い、とフロベールは決して望みません。彼は辞書の中に残虐で珍しいものを探しました。彼は、見たこともないものを書かなければならなかった、この見る能力を訓練しました。そして滑稽さを恐れて彼は生半可な知識よりもいつそ全て何も知らない方が容易であると分かる人々に、平凡にへつらう薬剤師のオメーを描きました。その後でトルストイの本を読んで下さい。あなたは率直さが大切であることを知ります。

(一九一一年十二月七日)

#### 四十七 囚人の違法行為 (DÉLIT DE DÉTENU)

つい最近、軍法会議にて証人として出頭した囚人が罵詈雑言を吐いて連隊長の顔に帽子を投げつける事態が生じました。その後、謝ることなどなく、彼は再度投げつけようとしてしました。何かの結果、即座に彼は死刑を宣告されました。この一連の事件には誰でも不条理以上のことに気付

きますが、判事たち自身が恐らく、法や習慣に従って行わなければならなかったことに十分満足行くものではなかったのです。

私は原因となったその人々自身に戻って、この判決について決して語りたくありません。自分の利害が絡む事件は、決して自ら裁いてはならないということは大変に正しいことです。しかし、これらの侮辱や脅かしは一人の囚人が齎したものであり、上官たちの心を打つことはなかったと私ははっきりと言えます。事件と関係のない他の上官たちも同じ様に、厳しく当たただろうと十分に確信出来ます。私が検討したいのは、言ってみるなら違法行為とか、罪の本質そのものです。この場合は、実際には違法行為も犯罪もないように私には思えます。何故でしょうか。何故なら行動しているのは囚人であるからです。囚人というのは、いわば一時的に社会の枠外に出された人間です。武装を解除され、監視され、現代の法や権力や全てのものと比較して、明らかに敵意を持った状態にあるのが囚人です。

違法行為とか犯罪は、信頼ある人間、つまり行ったり来たりすることが出来る人間で自分の活動に釈明の必要がない人間、武器や道具を持つ権利がある人間によって理解されるものです。罪と言っても取分け、少なくとも感情の表明に厳しい罰である時、その罰は信頼との相関関係にありますし、罪というものは心の中では主として不信の行為です。私は男を投獄します。彼は危険人物になるということです。私は、彼を最早市民として望んでいないということです。約束の期間に関して彼はその時、一方では自然法というものがあります。つまり、やれることは全て行う法律です。人は行為を禁じることは出来ます。しかし、懲戒する権利を行使するのは何時でしょうか。人は彼を捕らえます。彼は最早、市民として行動しませんし敵であり、公権力はその時あらゆる方法で阻止することが出来ますので、彼にもいわばあらゆる方法で逃げる権利があります。脱走することは違法行為ではありません。如何なる契約も実際それによって違反になりません。もしも脱走する囚人が牢番に対して義務を無視している、と誰かが言えば、人は馬鹿にするでしょう。同じ理屈で、如何なる種類の義務も、囚人には最早ありません。でも少なくとも彼は拘束を受けます。例えば、この男に殴ることや侮辱することは禁止されていましたが、それにも拘わらず、やはり確かに行われていました。そして、もしも何らかの罰が適用されたかったなら、その時は牢番の不服従を狙いましょう。勿論、囚人自身の行為を考慮に入れないとしても、牢番の行為は応じなければならぬことを十分に注意して下さい。この理屈が判事たちを満足させますし、この種の違法行為を直ぐに禁止します。

(一九一一年十二月五日)

平和主義は隣人に狙いがあったと私は実際に信じます。殺人、暴力、無秩序、法律無視、憎悪、残酷行為、略奪、醜悪な事にはつきりと反対する議論が重ねられている間、やくざな者たちでさえも敢えて大いに好かれる勇氣はないのです。しかし、戦争のことは全くこの議論の外でした。というのも一般的な感情によれば、戦争は全く何ものでもないからです。軍人はその様な行動や悪を嫌います。それを言いますし、信じます。軍人が間違っていると思われる時でさえ、更に慎重にしなければなりませんし、彼に説得したい時も表面上は不当であるから、最初から怒らせないことです。

兵士は殺人者です、何故なら人を殺すからと言うのでは余りに結論が性急すぎますし、それでは何もかもが混乱します。それは詭弁であり、決して理性的ではありません。私は主な死刑執行、正当防衛、暴力沙汰による殺人、過失致死、現行犯逮捕された泥棒の罪、計画的殺人、無差別爆撃、敵に対する砲撃を考えます。その詭弁家は、動機や大して重要でない機会や意図や考え、人を殺すあらゆる場合を敢えて言います。あらゆる場合において、人は殺人者になり人を殺します。明らかに、死の脅威から自分を防衛するために人を殺す人間は、殺人者ではありません。雄弁と情熱は集会が混乱した時には、或る瞬間に全てを取り違えることで良くなります。しかし、次に良識を取り戻して、はつきりと違いに気付きます。詭弁家は時間を無駄にしました。その上、言えるとすれば、多くを証明したいがために信頼という財産を消費し、浪費しました。それらの思いはその時軽蔑されます。彼は伝統そのものや、感情そのものの引き締めや、思考の底にある執拗さと休止を生みます。この運動は、この頃私たちの裡に生まれていることを私は言われますが、私は何も知りません。私は二、三人の報いられた作家を、そのことで信じる事が出来ません。しかし、結局のところそれはあり得ることです。そしてそれは大変に明白で、問題意識を持った平和主義者の議論としては逃げられない結果です。

反対に、戦争の意味を過去も現在も明らかにしなければなりません。つまりはそれを言わなければなりませんし、暴力というものが戦争ではないと言わねばなりません。誠意を持って戦争のルール、戦士の理想と倫理と寛大さを明るみに出すことです。戦いの本質的な条件としては、武装した兵士にも平和があります。正義も同じです。或る意味では平等も同じです。結局のところ勇氣とは素晴らしい美德であり、多分、美德とはそういうものです。その後で参戦する美德は、もしもそれが統治したなら、まさしく戦争が不可能になることを理解させるのです。そして私たちが断固としてそれを望むなら、それらの美德が統治し支配します。そこに平和への道があります。

(一九一一年十二月八日)

人々は比例代表制に拘っています。私も拘っています。頑固に拘っています。何故なら私は政治活動に引きずられませんし、その会話にも決して引きずられないからです。代議士でも立候補者でもない私は、賛成か反対かに強く命令されなかったからです。何故なら私は殆ど有権者ではない人々の意見を説明しているのであり、この意見は殆ど自ら進んで説明する機会がないように思えるからです。

要するに、人は私たちに何を納得させようと説教するのでしょうか。もしも私が十分に理解したとするなら、納得するには三点あります。一点目は、比例代表制が委員会や元老院の〈偉大な有権者たち〉の役割を小さくして、代議士たちが支援をしてくれた人々に報いるために何かの地位や勲章の名誉を与えるのを一貫して防いでいるというものです。そのことに私が先ず答えて言いたいことは、その進展には小説的で奇異なものがあり、私が知る限りではそれらの急進的な活動家たちは、言われている以上に大変誠実で無私無欲です。その次に、実際に法外で破廉恥な特別待遇は特に両親や友人たちに与えるものであり、代議士や大臣たちを支持している者たちです。それ故に、私は比例代表制に十分それを防ぐ何かを要求します。結局、委員会も有力な有権者たちも、比例代表制ですと郡の選挙投票に持っているもの以上に国の代議士に多くの力を持つようになるのです。というのも名簿の準備には骨の折れる交渉を前提としますし、それに有権者は直接参加することが出来ず、少なくとも代表団が明らかにするか、暗黙に決めるからです。これでは一点目の議論は駄目になります。

二点目を見てみましょう。比例代表制は、社会主義者や王党派が過激派勝利のために結びついて起こる過激な政党間の不条理な連合を不可能にするというものです。ところで私が尋ねるのは、これらの党派が一度結びついたらその連合が何故多くの有権者が望んでいたのか否か、議会では決して分からないかを私に説明することです。私が信じているように、もしも反対に有権者たちがあらゆる権力に抵抗しているなら、党派に対してもっと自由であり、政策よりも寧ろ人格の資質で選ぶことが出来る郡の選挙の投票の方がもっと良く抵抗する筈であると私は言うでしょう。これらのことを考えると、二番目の説も大変に説得力が小さくなります。

最後の三番目に、比例代表制の反対者が最も強く言う論点で、私の説が最も曖昧な処を私は最も正直に残して置きました。反対者たちの彼らが言うのは、比例代表制であるから議会は高いレベルの政治が生まれるのであり、程度の低い具合の悪い政治では駄目であるということです。私が先ず答えて言いたいのは、そんなことは何も私は知りません、何故なら有権者たちは組織された委員会によって上手に行動することを知りますし、各地方の苦情を聞かせることが出来るように最小限のことを知るようになる代議士についても同じであるからです。そして私が二番目に言うことは、偉大であるかどうかは余りに根拠が無く、偉大な政治には到底信用が置けないと私が言う理由は沢山あるのに反して、この具合が悪く上手く行かない政治が私には自然で合理的に見えるということです。

(一九一一年十二月九日)

## 五十 (理工科大学生)

水曜日の晩に、二人、三人、十人、二十人の理工科大学生が会いに来ました。大きい人も小さい人もおりました。金髪や黒褐色の人もおりました。良く見ると全員が地方からの出身者であるのが分かりました。しかしながら私が先ず眼にしたのは厳格な制服で、それから何だか神学校の学生が列を成していると考えて仕舞います。剣や金色のボタンや飾り紐のついた庇のある帽子があるのに、私がそんな風に思えたのはどこからなのでしょう。彼らには生来からの均一性があります。痩せた体に優れた頭脳です。歩き方はきびきびして規則正しいです。夢想家の頭脳であれば、決してそんな歩き方に適合されませんでした。彼らの精神は鎖に繋がれています。徒刑上の精神です、というのは言い過ぎでしょうか。

しかし、どんな種類の鎖でしょうか。一般的に、それらは通りでも人々が見る腹の鎖です。大変に小さな頭を引っ張る強い欲望です。あるいは膨らんだ胸で、怒りで膨らむ本当のふいごです。今は駄目です、動物的感情が打ち負かされています。どんな風に上手く言えば良いのでしょうか。精神は精神によって鎖に繋がれています。蟻たちは蟻の巣の概念によって変わると言われているように、個人の精神も集団と共通した精神によって変わります。しかし、そこには人間の最も高く価値のあるものの印も一緒にあります。或る夜、彼らのうちの二、三人がヴァイオリンを持っていました。それは抽象的な喜びであり、ピタゴラスの喜びです。

多くの真理は多分、始めるためのものです。青年期早々は真理が全てです。真理は光輝く甲冑です。経験は決して歪めませんし、着手しませんし、軽く触れもしません。数字と関係、それらは厳密に依存しています。抽象的な姿であり、姿の形式です。それはあらゆるものに共通した実際の思考であり、殆ど実際のものには無知でもあります。容易と困難があります。泥でも汚れでもなく、間違いでもなく、訂正でもなく、見てくれの幻滅でもありませんが、しかしながら眺望はあり、風景もあります。遠くは霧です。それと共に実際の可能な世界のために、まさしく立法者たちがおります。というのも遠くのものも近くのものも、全てがそれらの形式で、幾何学で良く調べて立派に解答するからです。このことを予見したタレスは二日間じっとした儘動きませんでした。アルキメデスは死ぬことを知りませんでした。そこにはもう一つの謎があります。はっきりとした謎で、良く考える者には理解出来ますが、熟考しないでも身を投じる者にはもっと良く理解出来るのです。

しかしながら、私は既に種には固着しません。属しかありません。そして、精神はそのものだけで孤立して生きていません。そのものの情熱とは何でしょうか。私はそれらを頭の野望と呼んでいます。それらは絶えず思想の自由を褒めそやしますが、思想の自由には特別待遇も同情もありません。恐らく、青春そのもので独りでのいる者は阿諛や善意では何も出来ません。というのも

彼らはそれらを知って判断しないからです。それとは反対に、ソルボンヌの人々においては世論や友情は判断力を和らげ、ここでは本来の手つかずの平等があり、愛国的な共和主義のジャコバン主義がXやYの中にあります。それ故に、有名な彼らの友愛が美德ある人物にさせます。そこでの成功は神であり、聖物売買ではありません。そのことは野心が最も高い義務であるかの如くさせて、そこから情熱は計算を思い出します。しかし、そこに入らずして誰がそれらを理解出来るのでしょうか。そして誰がそこに入って、それらを理解出来るのでしょうか。それは別種の人間です。人間の工場にいる昆虫のようなものです。それを挟むための道具や、観察するための拡大鏡や、支配するための監視場所を何処に見付けるのでしょうか。何かの狭い中にいなければならないのです。

(一九一一年十二月十九日)

(次章へ続く)

五十一 （悪口を忘れること）

「私の本が不当にも激しく中傷的に批判されたなら、私はどうすれば良いのか。私はその批判者を罰しに行くだろう。しかし、それは些細なことなのだろうか」。私は彼に言いました、「私は一番良く効く最高の薬を知っています。それは彼が書いたものを絶対に読まないことです。悪というものが完全に取り除かれます。読めばそれらの情熱が何かの狂気にあなたを導くものと私は理解します。読まなければ、まるで彼は何も書かなかったかのようになりますし、それが絶対に良いのです」。

この薬は決して幻想ではありません。私はそれを五、六年間、間違いなく或る時、或る地方で実行しましたが、そこはブルターニュ地方でした。そのカトリック系の日刊紙「クロア」は一週間に亘って私を攻撃しました。私に言いたかったことは非常に痛切でした。しかし、私はアレスのように傷付きませんでした。新聞が来ても、私は決して開きませんでした。そして極めて狡い友人が、その新聞を差し出して言いました、「この中にあなたのことが書いてあるから見てご覧」。私は彼に答えて言いました、「下らないことを私に見せるなんて、あなたは大変な物好きだ」。そんな風にして私は心の平安を保ち続けました。大した被害ではありません、というのも下らない散文を読まないことは、そんなにも難しくはないからです。

正確に当たっているにしろ不当に外れているにしろ、私は攻撃を受けて酷く混乱しているように見えた人々に、大変簡単なこの方法を勧めました。でも彼らは私の言うことを聞きませんでした。眠れなくなっても、それで恐らく生活費を稼いでいて他のことには手を出さないでいた人間の、有毒な文章を自分自身で暗誦する程読む危険を負う方が彼らは好きだったのです。でも結局のところ、どんな素晴らしい結果になると言うのでしょうか。殺したいという欲望が二人の敵同志に等しく欠けていた奇妙な決闘であったとしてもです。そして、直ぐに忘れるようになります。それは許すことよりももっと良いもので、時間が確実に解決してくれます。知らないでいること、そして目的を達成するに欠くことの出来ない無関心な状態に直ぐに身を落ち着けることは、最良に値しないのでしょうか。

私は、最もしっかりとして大胆な政治的人間は直ぐにその立場を取るのを、十分に確信しています。彼らには恐らく秘書のような人がいて、彼らの代わりに新聞を読み、自分で罵詈雑言を審判する者になります。こんな状態になると、彼は解決することから全て避けられなくなります。というのも、秘書の心は乱れ、悪口が大きくならなければならないからです。そして更に、名誉を忠実に守る者は、恐らく二十四時間通して行うことになります。通りで、その日の新聞が大声で売られると、前日の新聞はすっかり忘れられ、今日の一番小さな悪口が前日の一番大きな悪口を全て消します。「でも、あなたの沈黙に人々は驚いていると思いませんか」。私はそれに答えて言います、「どの位の時間、そのことを人々は考えるのでしょうか。人々はありもしないこと

を殆ど考えません。ところが否認すれば、殆ど新しい悪口と同じ様なものになり、既に忘れられた悪口が再び言われるようになります」。この慎重さは最初びっくりされます。何故なら、めったにない珍しい考えであるからです。しかし、消化不良とか風邪に対して振る舞うように、何故怒りや不機嫌からも自分を守らないのでしょうか。

(一九一一年十二月二十日)

## 五十二 (若者でいること)

「私たちにとって若者でいることは自分自身を信じることであり、人生を信頼することである。それは若者でない人々が名誉に突き進むように美に突き進むことである。若者でいることは、中途半端なことを軽蔑し、毅然とすることを愛するものである。若者でいることは、感動したり熱狂したりすることが出来ることで、それは自分とは違う存在に人生をはみ出すことであり、自分の周りにそれを発散して楽しいと感じることである。若者でいることは、信仰にまで人生を愛することで、献身にまで同胞を愛することであり、それは簡単に偉大なことが出来るものであり、易々と自己を犠牲にすることである。若者でいることは、新鮮な眼で自分の周囲を見ることであり、新鮮な心で深く愛することである」。私は立ち止まって考えなければなりません。全文を写してみました。

これらの言葉は、〈革命的社会主義者の学生宣言〉からの引用です。それは読み易いものです。私たちの学生時代には誰もこの様な宣言を書いたり読んだりする機会はありませんでした。何故でしょうか。私には良く分かりません。そういう時代ではありませんでした。約二十年前には恐らく、暴君たちは未だ余りに修道士とか司祭の顔をしていました。私たちの精神はその中で闘っていました。しかし心は多分、少し渴いた儘でした。そこから或る軽薄さが行為に出ますが、それは本当のことを敢えて言う考えが正直で厳密であったのです。そして私たちの中で、下らない文学とか阿諛とかから逃れ、あるいは下らない遊蕩から逃れる者たちがいますが、彼らを救ったのは知性です。従って、スタンダールの『赤と黒』の主人公ジュリアン・ソレルが言うように恐らく、私たちは狡さから幼さまでを成長させたのであり、最良の人々は白髪になっても青春や感動を表しています。この道には確信があります。何故なら、その発達における理性による規律は、絶えず年齢による影響を妨げているからです。しかし、この青春の保持は大変に愛すべきものがあり、年老いた老人に対してもつれなく説教します。君主制擁護者、民族主義者、シヨン運動家、社会主義者たちは、至る所で熱狂的な理想主義者でしかありません。この青春に恐怖はありません。

確かに何時の日か、私も説教を始めなければなりません。時代は有利になって来ました。一ス

一で購入する日刊紙「急進説教」に書かないとしても、私はこの地位で何をすれば良いのでしょうか。私は急進的であり、そこに止まって大変容易に嘲笑されても、私たちはあらゆる処で行動を開始します。急進的とは、つまり民主主義と平等主義を支持することです。何故なら経済秩序の不公平は、何よりも私たちが〈君主制〉に止まる結果になるように思えるからです。無記名の自由投票、公明正大な開票、厳正な監視及び政府の責任によって、普通選挙を実現させましょう。換言するなら、急進的な共和主義者になりましょう。そのことだけがお金持ちの横暴、警察や官僚の野望を小さく抑え、ついには遠回しに警察権力を支配することを狙っているのですが、それは経済力による恒久的な陰謀です。よろしい。しかし、その次は国民が望むものです。国民が望むのは、共産主義とか集産主義と同じ様なものです。それ以上でも以下でもありません。平等の権利によって構成された公平さ、この公平さが大地から出て来ると、〈制度〉を蒼白にさせるのです。

(一九一二年一月三日)

### 五十三 (急進主義)

急進主義とはそれ自体が社会主義者でも平和主義者でもなく、その種の者ではありません。彼は決して所有権、給与、国内法や国際法の突然の変更を主張する者ではありません。急進主義とは、それ以外の計画においても自ら発展して行くものです。彼は少なくとも権力の正当性や源泉を考察します。名前が付けられる根本まで行きます。あらゆる政治理論が予測したり見抜いたものを手荒く発見します。スピノザやルソーの思想がはっきりと理解したのは人民が齎す力であり、もしも彼が横領者でなかったなら、行政官という者は人民を代理し、委託によってその力を行使しますし、報告をすることになっています。その思想は革命と同じです。それは臣下としての市民の義務を明らかにすると同時に、君主としての権利も明らかにしています。あるいは、もしもあなたが望むなら、自由意志によって全てを決める良識によって、それは一人ひとりの情熱を規制します。それ故に厳密に言って、それは政治の完全な制度であり不平等や独裁や奴隷というものに反対して、根本的な平等の上に築かれるものです。同様に、雄弁とか説得力のある能力を濫用したがる市民にも反対して、自らが進んで主人になることです。そして私は、再生された君主制をほんの一瞬でも壊す努力を絶えず行うことに空想的なものは何も見ません。それを行うのは可能です。私たちは毎日、大変に激しく大臣を抑制しますし、恣意的で勝手な行動を告発し、法を悪用したり不適切に運用するのを非難します。しかし、これらの努力は効果がなく、この世を嘲笑していると彼らは言います。それでもそれなりに厚かましい人であったならば、もしも私たちに自由なジャーナリストや詰問者や監視委員会がなかったならば、どうなるのでしょ

うか。

急進主義はこの様に貴族制度に反対しますし、その貴族制度は多少なりとも強力に組織されて、独裁とか君主制とも呼ばれます。その代わりに、例えば社会主義は決して政治的独裁に直接反対しません。というのも集産主義を実現させる王が理解されることはあり得ますし、その説明には間違いがないからです。臣下たちは、例えば遠征中の軍に見るように全ての食料は共有のもので、経済的には平等です。しかし、彼らは決して政治的には平等ではありません。その上、良く似た制度が直ぐに多くの不平等を齎すのは明白です。しかし結局のところ純粋な社会主義者は、強力で調整しない権力がお金持ちの財産を奪ったなら、政治的権力しか制限しない厳密な〈急進主義〉であればその権力が気に入ることもあり得ます。社会主義者たちは何でも次の様に言います、「お金持ちたちがいて、お金持ちたちが王様になる限り、あなたは雲の中で戦っているのです」。これらの事実には答えなければなりませんし、次のように言えなければなりません、「お金持ちたちはおります。しかし、彼らは王様ではないのだ」。そして私が、本当の戦いで唯一の有効な戦術であると信じているのは、お金持ちたちをあらゆる政治的権力から解任することであり、それが富を奪うことになるのです。もしも自分自身を正義によって救われたくないとするなら、低級な快樂で自殺するように宣告されることになるのです。

(一九一二年一月十日)

#### 五十四 (健康な精神)

私は近頃、奇跡のことを話しましたが、恐らく余りに曖昧な内容です。観念が解明される時、私は本気で言います。つまり奇跡を明白に理解するためには、実際に紐のようなものの結び目が形づくられます。そして、もしも最初に見付けた結び目の端を大変性急に引っ張ったなら、屢々その結び目はしっかり攔んだように固くなります。もっと悪くなるやり方です。寧ろ、その考えに一息入れて余裕を持ち、もつれを緩めてゆったりさせて、柔らかくゆっくりと解くべきです。精神の結び目を作らないようにするには、結局は疑うことを覚えることです。私が良く言うように、せっかちは精神にとっての主要な欠点であり、多分それが唯一の欠点です。十九世紀で最も力強い思索家の一人であった新カント派の哲学者シャルル・ルヌヴィエは、あらゆる種類の狂人たちについて深い見識を持っていますが、狂人たちは決して疑うことがないということです。彼らは、自分たちに影響を与えるものは何でも全て肯定します。思い浮かぶ最初の考えを利用しますが、首つり用のロープであれば、次に動けば動く程に紐を握りしめるようになります。ところで途方もなく気違いじみた者たちは、病気であると私は十分に認めますし、彼らを医者任せます。しかし、病気には幾つかの段階があり、沢山の半狂人がおります。まさにそれ以上に私た

ちは一人ひとりが情熱の感情の動きに陥り易く、瞬間的に狂人のようになります。そして、理性的な儘でいたいと思う人間にとって重大な問題は、絶えず傾聴するように要求する間違った情熱を正しい判断によって防ぐことです。例えば、架空の陰謀を捏造する雄弁への怒りがあり、それらには真実の生き生きとした様相を与えるのです。あるいは疲れ切った人は落胆して似合わない着物を着て、巧みに縫われた理性というマントを着るのです。あるいは何かの驚きとか、計り知れない怒りは先ず活気を与えて物事を変貌させ、そしてその度に記憶となって、私たちの証拠として印されるのです。間違つて訓練された精神や日常的に普通に思考することでは、希望という魔術によって一度に不幸な予感や心に触れる感覚を多く変える前兆に結びつける情熱により、これらの奇跡の全てに対して武装するのでは十分ではありません。

多くの出会いは可能です。誰も夢を自由に使えません。未来が偶然に、私たちに教えてくれることはあり得ます。取分け、感動的な予言が私たちを行為へ導き、独自の力によって立証されるようになります。それにはシェークスピアの魔法使いたちがおります。「あなたは王だ」と言われて、マクベスを殺人に導きます。結局のところ、想像力はそれが望む過去を再現し、事件後にその予言をやり直すのです。私たち自身が行うとか誰かから聞いたような話は、決して感動させないということはあり得ません。私たちの感動する力が明らかにします。私たちにはお手本はあり得ず、恐怖の後に危険を判断するのを妨げます。大変な危険の中で、多くの人々が当てのない懇願運動を行います。しかし、彼らはそれを神の証拠に繋げません。一言で言えば、人は自己放棄するや否や、生まれた思想を全て信じます。ところがもしも太陽が回っているように見え、水中の棒は折れているように見え、遠くの枝は全てが小さいように見え、その他の知覚も偽りであったなら、それらから生じる思想も私は間違っていることにして仕舞います。そして私は、それらを表面的なものとして方法論を通して見詰めます。懐疑は精神を健康にします。

(一九一二年一月十一日)

## 五十五 (速度)

或る老人が昨日、乗合馬車のことを私に語ったのですが、ルアンからパリまでの旅は二日かかったと話していました。当時からは何という進歩でしょう。最も権力を持った王でも、馬に翼を与えられませんでした。今日の職人は三日分の賃金で、ルアンからパリまで二時間でいきますが、ルイ十四世でも出来なかったことです。この様に僅かな間に手に入れた人間の能力は、それ自体は確かに良いものです。そして小さな子供たちが機関車に驚嘆するのは本能的に正しいことです。

しかし、この能力を利用するには多くのやり方が可能です。時間を節約するように出来ますし

、安全自体を増加させることも出来ます。それを誰が選択するのでしょうか。速いことは物事を行うには大変に良いことですが、もしも合理的に考えるなら安全もそれ以上に重要です。ところが私たちの情熱は、全く別なことにも影響を及ぼします。何故でしょうか。何故なら速いことは直ぐに感じる事が出来ますが、それに反して危険は単純な知覚によっては全く予見出来ませんし、それは自然であるからです。

速さは感じる事が出来ます。事物が逃げ去って行くことでそれが分かります。聴覚や体全体で速さを把握します。手許の時計でもそれを計ります。機関車の運転士がブレーキを握って警笛を鳴らす時には、誰もが列車を全速で走らせないのではないのでしょうか。誰もが一緒にいて呪わないのでしょうか。列車の遅延は、いわば私たちの眼の前で起きます。そうでなければ事故が起きるのも全く自然ですが、まさしくその時はそのことを人は決して考えません。時計を見る旅行者は良くいますが、列車が小さな駅で時間を浪費する時、彼は独り言を言って体を揺らしています。

交差点で心配する人や、信号が正しいか監視する人は見たことがありません。そんな情熱は意味がありません。我慢出来ないことが生じれば、最初の困惑が大きくなります。しかし、恐れは決して生まれません。私はそのことを考えようとしてしまし、急行列車の中で私が大変なスピードで走っていたように、昨日それが生まれるようにしようとしてしまし。しかし、不安な感情は原因が無いので消えました。私は自分で何かを待つ訓練をしていましたが、何も起きませんでした。それ故に私は、少なくとも三十秒以内に平原や村が滑り去って行くのを見ながら、恐れから本当の喜びが僅かに始まるのに戻りました。そして今度は、想像力が大変良く先に飛んで、既に小さな家々や工場や煙や幹線が見せてくれるものを描き、近づき、交差し合い、到着します。結局のところ私の苛立ちは更に全く理由がなく、苛立ちが一つの目的だったのです。速さは何かです。危険は何ものでもありません。事故そのものは起こり得るものですが、それは全く何ものでもありません。実際の事故は過去のもので。そして更に、ベッドで面白く読んだ物語が、今を酷く怖がらせるのです。そこには世論が速度を要求して手に入れる理由がありますが、多くを言っていない。世論は安全を要求しない間に、しかし特に安全に執着します。私たちの現実の思想や活動は、事物の思想であるということです。ところで私が快いクッションの上において、暖かく、何時もの音で気持ちを静める時なら、私は安全だと感じます。これらの印象は理屈以上に強烈です。私は、事故で衝突することを良く考えますが、それを信じることはありません。それ故に私は思考から逃れます。仕方がないことです。もしも旅行者たちが理屈抜きで性急であるのと同じ位に、理屈によって臆病者であったなら、大事故にも遭わないでしょう。

(一九一二年一月十三日)

或る人が私に言いました、「もしも今日でも壁を見て戦争や召集が読み取れるとしたなら、私たちは何を考えるのでしょうか」。この考えは恐らく、全世界で生じていました。その上更に、私が仮定するのは、誰もが新しい感情と意見は同時に手に入れるということです。熟考と非難は、少なくとも可能な戦争のことを考える時に今の精神に齎すものであり、新しい事実によって直ぐに排除され、私たちが決心して新しい状況で行動する場合には全てを注ぐのであると私は特に信じます。火の恐怖は、少なくともそれを見た時と考えている時とでは、同じではありません。そして病人になっている人には、病人になることを想像したい人の思考も感情もなく、この現実を熟考するのです。仮定は賭けでしかなく、私たちの自由な思考は見捨てられています。しかし、実際の変化は全く別の権限を持っています。私たちは押されて肩を擱まれ、身繕い後の処刑を私が想像するのと少し似ています。自問させられることは大変に無駄です。「如何に私はするのか?」。事件が起きる時、討議する必要はありません。それ故に平凡な議論になります。「勇気を持って」は、私には不必要に見えましたし、否定しました。人間の勇気が左程重要でない場合は決してありません。死ぬことと同じだけ言わねばなりません。それは多分、死を恐れる以上に人々をもっと不安にします。何故なら人々は自問するからです。「私は何をすべきだろうか?」。しかし、事態は人々と関係なく行われます。彼らは決定する必要がありません。

戦争状態と同じ様に、それらの心配は全世界にとって急を要するように、些細なことにも没頭するために自由が使われるように私には見えます。例えば旅に出るとか、食料を手に入れるためのようなことです。そして、同じ活動を行うにしても多分、観客がいる人々よりも強く興奮することは少ないのです。例えば熟考すればもっと容易に眩暈するようになります。梯子の上において観客も見ているようなものです。

既成事実には思考を殺す力があります。私たちは劇場で強く感動します。私たちが、役者になる現実のドラマにおいては、劇場と同じ種類の興奮やそれ以上の強い感情を持つと信じるのは間違いです。実際の出来事はギロチンの刃のようなものです。その刃はドラマを終わりにしますし、それと同時に削除します。しかし出来事はそれに接触して、恐れが済んで、他のことを始めようとして、私たちを長く押し進め、抵抗することも出来ない人々においては何かを殺しもしますし、私たちが決して行かないような処へまさに投げ入れます。出来事が過剰になると、阿片のようなものになります。或る人が、芝居を見た時しか感じない絶望の光景に哀れさを感じても、我慢したように私に言いました、「この感情の狂いが私は怖い。実際の悪を仮定するには、私はどんな能力を持てば良いのだろうか?」。しかし、あなたは麻痺を当てにしなければなりません、事実を知るや否や、恐るべき事実を生む麻痺状態です。批判する状態においては、実際の悪が消えることは可能です。その代わりに想像力を働かせる人間は、その度に悪いことを恐れます。要するに、もしも人生が熟考して考える文学者のためにあるのと同じ様に、現実の事実の中にも恐ろしいことがあったなら、決して我慢出来るものではありません。私が水に飛び込む前に抱く恐怖は、実際にそうなる時に感じるものよりも極めて悪いものであることを私に教えてくれてい

ます。

(一九一二年一月二三日)

## 五十七 (鉄道事故)

鉄道事故について私は最近書きましたが、その主な原因は、大衆が何時も速さのことを考えて、安全を余り真剣に考えないことにあります。技術者たちは何はさて置き既に崇拜すべき神を安全の他に持っているにつけ加えて言わなければなりません、それは〈優美〉な効率というものです。目的が何であれ、それを提供する人々は何時も巧妙な優れたものにしたいと思っております。つまり正確で簡単で新しいことです。彼らは何時も斬新な橋とか、水の下に単純なパイプを愛しますし、それらはトンネルに利用されます。あるいは針の穴のようなものですが、多くの列車を通過させる時刻表や分岐器と線路の組合せがあります。あるいは雷雨が来るだけで故障する自動信号機を丹念に何度も改良します。或る技術者は、大きな駅に近付いて来ると、色々な信号の種類や数に迷ってしまうことを最近告白していました。速度が上がると煙は空気摩擦で吹き下ろされ、二つある信号の一つが見えなくなります。技術者たちは何かを思考することが好きではありません、何故なら事物は大変単純ですし、救済策も同じ様に大変に単純であるからです。私が屢々繰り返して言っている新しい証拠とは、産業を担う中にあっても、最も熱心にけちを押しつける人間は実地家であるよりも大変な詩人であるということです。

私たちが昨日、詭弁家たちの昼食後に話をした時、或る人が尋ねました、「地下鉄の歴史には、誰も予測出来なかった一九〇三年の唯一の大惨事を除いて、何故大惨事がないのでしょうか、何故なら鉄道実験は如何なるお手本にもならないからでしょうか」。一人ひとりが証言を齎します。というのも私たちは技術者とか運転手とすっかり知り合いになり、地下鉄の技術者たちは何よりも先ず事故の可能性のことを考えていたという結論を確認したからです。何故でしょうか。何故ならこの地下の交通は大衆には安全が心配であったに違いないからです。何故なら求められていた速度は容易に達せられなかったからで、その代わりに完全な安全を旅行者たちが維持しなければならないからです。さもないと市内電車やバスの方が良いということになるからです。それ故に、大変に費用がかかって優美ではありませんが、上方とか下方にトンネルによって道路の交差点を絶対的に全て取り除きます。そのことから分かることは、他の何よりも安全を目指すならそこに至るということです。

しかし、弱者である大衆の乗物も考慮に入れなければならず、それは大変迅速に停止出来ることです。沢山の駅には、列車が停止している時、信号が見られていることになります。運行には一律性があり、各々の列車は決して追い抜いて先行しません。交通手段は施設と同時代のもので

あるとつけ加えて言いましょう。それに反して普通の鉄道においては、何時も古い線路に新しい重圧や速度が試行されます。旅行者たちには選択の余地がない、ともう一度言います。技術者たちは自分たちのけちな仕事を詩に委ねているのです。

(一九一二年一月二七日)

## 五十八 正義は勝つ (LA JUSTICE VAINCRA)

正義は何時も勝ちます。何故なら正義とは力そのものであるからです。そこには歴史を支配する定理があります。歴史家の精神は同時にそうではないと言うのでしようが、まさに反対のものに支えられるのを望むことは、何であれ確かであると私は思いますし、人民が敗れても彼らのための法律を十分に明らかにして時々は強くなり、武器に固執しなかったことを分かせています。しかし、私たちは耳を傾けましょう。人民は何か領地の法律を持つことが出来ますが、それと同時に力を持つことはありません。そのことは人民が骨組みのようになっているのであって、風習や組織における内部にそれ自体の法律を持っているとは言いたくありません。力を与えるのはあれこれの法律ではなく、十分に明白であることです。しかし、それは法律に従った生活であり、力を与える法律に従った組織です。

分派に分割された人民を考えて見ましょう。そこでの法は軽視され、より大胆な人間の感情に従って市民の関係を規定する不平等なものです。これらの人民は殆ど重要ではありません。人間の屑でしかありません。政治的城砦と言えるものがないのです。それ故にポーランド人の諺になっている勇氣は、決してポーランド人を救わなかったと私たちは理解しています。

今は組織化された不正を考えて見ましょう。希望もなく働いているのが人民です。鎧を着けた領主は只、防衛の機能だけを訓練しますが、それは自然な結果であり、調整されていない力です。既に、その様な力は騎士道的な美德によってしか維持できず、貴族たちの正義と平等の精神によって維持することが出来るのが分かります。要するに、プラトンが言っていたように、どんな山賊一味でも構いませんが、彼らの中で公平になっている状況と別になっているものについては不正でしかないことになります。しかし火縄銃や大砲が、甲冑や封建的な塔にとって代わります。人間は、それとは別の働きをします。市町村は武装し、正義の精神と同時に自らの中に権力を発達させます。人民は戦うことを誓って力が認められます。それは権利も平等も無く行うことであるとあなたは信じるでしょうか。

王や王子たちのために盲目的に自殺させられる、ブルターニュ地方の王党派である〈ふくろう党〉の例があります。しかし、残酷な状態の儘でいる人民を仮定して見ましょう。そこに大産業や支援政策や日々の発明が発展して船や大砲や銃や火薬や弾薬や戦争のための貴重品を私たち

は見るのでしょうか。それと同時に人民が教育を受けて強くなり、近代武装による軍隊の平等を獲得すると同時に政治的平等もなければ、経済的平等も行われなことを、何故あなたは望むのでしょうか。日本の軍事力は、産業の進歩と平等の精神を同時に示したという事実注視して下さい。神の上に法を置いた古代ローマの共和制の力は、何時も同じ法が、実に様々に時代に現れています。革命的精神は君主制の武器を一掃しました。そして後に、その財産が党派を変える時、その底にはフランスの専制君主制への反対を明らかにしたドイツ人の自由は既に無いのでしょうか。そして、ドイツが自分の塔を軍事独裁によって押し潰すことが出来るのが本当であったなら、それは信じている以上に強くなく、その代わりに私たちは信じている以上に強くならなければなりません。平等は軍隊の力です。

(一九一二年二月五日)

#### 五十九 (共和制の棘)

生まれつきの支配者たちがおります。彼らは意地悪で正義を軽蔑している、と私は決して言いたくありません。私は、軽蔑するしかない人間たちなら知っていました。こうした訳で、いったんその美味しい餌が争われることがなくなると、あなたはそれが普通で、必要の場合にはぎりぎりの量が分かります。しかし、彼らの美德は王座にしか輝きませんし、称賛を心の糧にしています。考えて下さい、彼らは清廉潔白で注意深く細心綿密です。大衆の中に身を投じて下さい。彼らは公正を欠き、判事席を与えないで、彼らが行うことは不正の考えから意地が悪くなります。その意味で彼らは革命的なものに反対しますし、それと共に金力とか議会とか省庁を論難するために屢々気が合います。現代の支配者たちは秩序を愛し、もしも支配者が少なくとも王座の近くに小さな足乗せを保証しないとしても、彼は支配者に身を捧げます。彼は大変上手に挨拶します。大変上手に服従します。しかし、彼は人からも挨拶されたいのであり、尊敬もされたいのです。強固のヒエラルキーの外に出るのは、亡命した王たちです。彼らは最も些細なことにおいても一貫した政治を行って来たのです。彼らは尊敬されるや否や仲が良くなり、親切になり、素朴になって、「気さくな人ですね」と言われるのを私は良く見ました。称賛とは怪しげです。私にとっては、それは確かに別ものであり、その様な称賛を浴びると、顔が赤くなって恥ずかしくなります。平等の精神は無礼と同じ様に、度が過ぎた人の良さは嫌いです。彼は施しや情けを表すだけで平等を受け入れません。

バルザックの作品『ラ・ベアトリクス』には古いタイプの貴族の画家がおります。密度が濃く非常に豊かで、大変に難解な作品に読者は先ずびっくりします。デュグエニク家の人々は簡素で貧しく尊敬されているのが分かります。彼らの召使いのガスランは昔からおります。彼は家系と

は別の人と見られています。この相違を尊重しています。宗教と一緒にそれに従います。報酬に関しては王室と同じ様に扱われ、平等を真似ています。しかし、自由にしています。良く撫でられる犬は、サロンでは独裁者になります。ジャコバン党の狼なら決して首輪を望みません。

この平等の情熱、この好意に反対し、感謝に反対するジャコバン党の激昂は屢々、間違っ理解されます。人はそこに、或る種の辛辣が羨望、希望のない野心、高尚になったものを全て抑える残忍な喜びを理解したがりますが、それは人々が望む限り自分自身を高尚にすることが出来ない後悔によるものです。従って良く言われることは、平等主義のジャコバン党は良い地位とか、彼らの真の本質を直ぐに示すには僅かに独裁者の権力しか期待せず、彼らが敢えて言うように経験によって、強力な権力の必要性をその時見分けることです。それは本当に一部の人々です。勿論、ジャコバン党には美德があり、人が思っている以上に良いものです。そこには野心のない反抗する精神があり、労働と秩序と規則を受け入れますが、崇拜の最も些細な部分でもそこに混ぜ入れたくないと思えば良いのです。その点について、彼らは後に引くことがなく、強情です。彼らの長がジュピターだと自認するや否や、直ぐに罰したいと思ひ、直ぐに抑えたいと思ひ、そして冷酷になります。もしもその長が再び姿勢を正し、雷を轟かせたなら、その時は無礼が確かな武器になります。もっと正確に言うなら二十五歳のジャコバン黨員にとっては、厳格な義務であるとさえ言うことにしましょう。彼らは共和制の棘であり、共和制と関わり合う人にとっては最悪なのです。

(一九一二年二月八日)

## 六十 学課 (LEÇONS)

急進派と呼ばれている、あるいはもっと正確に言うなら急進社会主義者と呼ばれている代議士が、パリ人たちに説教するために村からやって来ます。彼は一万五千フラン持っていればお金持ちであると信じており、大事業をしても決してお金を稼いだりしなかったと自慢している男です。倫理学の教授たちは呆れています。彼らは能力も美德の価値であると考えます。能力とは大胆さ、発意、人間と事物の知識、一方と他方との結合、遊ぶ情熱で財を成すと彼らは理解したくないのであり、結局のところ必要性に沿って資源を調整することであって、資源に沿った必要性ではないのです。お金を必要としない人間は何もしませんし、何者でもありません。彼は議会の椅子のクッションでしかありません。そして再度、道徳的反省をする人です。政治家はそんなことを聞かず、時々一寸見て、そしてそのことをもう考えません。それが最初の学課です。

そして次に、急進派は要求するための何か小さな仕事を持っていることがあり、彼自身のことでなく、影響力のある有権者のための仕事ですが、確かなことは分かりません。政治家は道を

ならしますが、十分に障害物を数えて、何時も最高の計画に関心があつて、正義は二の次です。

「親愛なる人よ。あなたは決して謝つてはならない。それが力の駆け引きだ。そこには私のような人間に一目置く有権者の何らかの関心がある。あなたの田舎では全てがそんな風で、原則よりも厳格であり、他のことが問題になつても、彼らの遊びが面白くなるや否や、理性には耳を傾けないし、盲目になる。彼はここでも同様で、殆ど大袈裟な演説はお笑いだ。あゝ、あなたは養成される。遊びながらルールを覚えているのだ」。これが二番目の学課です。

三番目の学課は、省内の一隅で与えられます。「あなたは、あなたのルールに従つて行動する。しかし、そのルールに反対する者の邪魔はしない。あなたの裡で人はあなたと敵対するのを私は知っている。知事のあなたは支配者に奉仕しながら、あなたへの軽蔑全てに対して復讐する。何でも反対して、あなたは誰でも知っている誠実さや世論の驚くべき不変さに救いを求めている。しかし、最高の偽善者がその現場であなたを打つ。彼は原則を表明することだけが辛いのだ。成り上がり者は決して敵を作らない。あなたに反対する人間は、選ばれるために大変に急進的である。しかし、それはあなたの集団から最良の党を分けことになる。知事や穏健派の人々は、他の党に着手する。あなたにはお金がなく、あなたに反対する人の腹の底も見えない。あなたの新聞は代訴人のお知らせと県庁の告示を同時に把握しようとする。気を付けなさい。未だ何も失つてはいないのだ。しかし、昨日のあなたの話は少し無礼でもあつた。状況を決めつけていた。内閣で議会在が支えた人間は過去のことに傷付かない。最早、現在の間違ひや未来のためにしか恐れはない。ところであなたは、彼の何を非難するのだろうか」。これらの話は至る所にあります。彼らは議会のロビーを悪臭で充満させます。先見の明のある人は、そんなことになるのを決して期待しません。彼はそこに優雅さを入れます。雄鶏が鳴いたかもしれない前に、彼は国民も先生も友人も知らないと言います。

(一九一二年二月十一日)

(十一月号へ続く)

一ノルマンディー人のプロポIV  
【2013年10月号】

<http://p.booklog.jp/book/76636>

著者：アラン （翻訳：高村昌憲）

翻訳者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/masanorit/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/76636>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/76636>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパブー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社ブックログ